特220
438

妹妻

女性に與ふ

『光は闇より』の著者
岩橋武夫著

始

時220
438

妻・妹・母

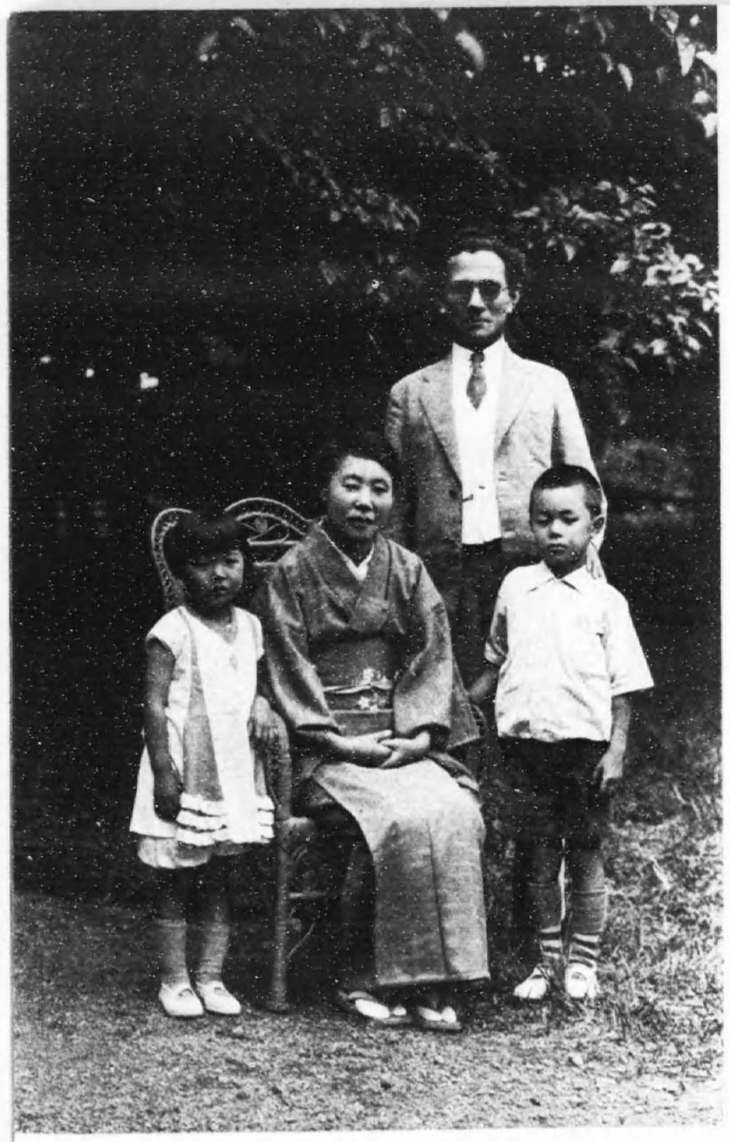
女性に與ふ

「光は闇より」の著者
著夫武橋岩

發行社界世曜日

昭和八年
帝國圖書館

央中んさ子靜妹令さ豊母氏夫武濱岩
レブ授教學大谷龍君夫のんさ子靜は
氏尊文岳謚るあ名てしさ家究研クイ



岩橋武夫氏御一家
の近影中央中ほど子
夫人左右長男英男
君と長女惠品さん

序

一九三〇年の末に『光は闇より』を世におくつた私は、ほゞ三年を閲した今日その姉妹篇とも名づくべき本書を今度は女性大衆におくり得ることを悦びとする。乏しい失明體驗を書き記した、かの『光は闇より』が既に十萬册を賣りつくしたと聞かされて、今更の如く私は驚いてゐる。これは私のちつぽけな學問や努力の然らしむる所以ではなくして、私を今日あらしめた神の恩寵であり、我等のために十字架を取れる主イエスの御勲であることを痛感せざるを得ない。あゝ榮光實に神にあれである。併しながら顧へつて思ふに、それは神とイエスの恩惠に基くとはいへ、また地上に於て私のために愛を捧げ涙の忍苦を耐へてくれた人々によることをも忘れるわけにはいかな

い。こんな不束な私にすら今尙日本の各地のみならず世界の諸所に於て、多くの祈りが捧げられてゐることを思ふとき眞實感謝である。『默した人の祈り』と私は『光は闇より』の序に記しておいたが全くその通りである。書かうとして書けず、語らうとして語り得ない生命の實在を、愛、光、力としてしつかり感得し得る體驗こそ、實に魂の藝術であり、人格の構成であり、祈りの祕義であらねばならない。水都ゼネヴァで冥想的な生涯を送つたアミエルが日記の片隅に『獨語は對話なり』と記したのも、この邊の消息ではあるまいか。また紀元三世紀の大思想家プロティヌスが『孤獨なる魂の孤獨なる神への飛翔』といつたのも同じ消息ではなかつたか。何はともあれ、かゝる『默した人の祈り』こそ力であり、望みである。而もかうした祈りと涙ぐましい奉仕が私の背後に、特に三人の女性によつてなされてゐたことを告白し得るのは、私にとつて何よりの悅びである。その三人とは實に私の母、私の妹、私の妻である。故に

本書中に纒められた三稿が世の母、妹、妻の名に於て女性に捧げらるべき記念品であることも自ら明瞭となるであらう。

秋の空は晴れて高く、私の窓邊にも百舌鳥のきしり聲が聞える。この淸らかな自然の前に人間と人間の歷史とは、餘りにも多くの懺悔を持ちすぎてゐる。ナザレの村にもあつたこの秋を、近世の村落や都會の暗い貧民窟へ連れて行つて見るとき、私の心には悲しみが湧く。秋の鳥は歌ひ、秋の花は咲いてゐるが、これを聽き、これを見る人の心は如何。あゝ眞實に澄みきつた心の秋、その靑い空、和やかな鳥の歌、愛の花を心の野邊に探ね得る女性は幾何ぞ。その人こそ昔も今も未來かけて幸ひである。祝福が下るであらう。その人は神の御光に照らされて十字架上の主イエス・キリストの顏の榮を拜み得るであらう。靜かであるが深い、そして涙に充ちた微笑、それはダ・ヴインチの描いたあの『モナリザ』のそれの比ではない。この微笑を通して女性のく

さゞ〳〵な心の闇が、魂の悶えが、解けぬ家庭の問題が解決されて行くやうに、さうして更生の力に立ち上つた健氣な聲音が、讃美の歌聲と共に私の闇の窓を勇ましく通り過ぎてくれるやうにと、私はさう祈りつゝこれを序に代ふ。

一九三三年秋十月

南大阪の寓居にて

岩橋武夫

1

母

自殺せんとする女性へ

母によりて更生せる私より

『神は愛なれば扉を閉し
給ふとも窓を開き給ふ』
（伊太利格言）

自殺は果して美しい憧憬の對象か

苦しいから、悲しいから、やりきれないから、つまらないから、腹が立つから、そして淋しいからといつて、死を目指す人の多いのは、何を物語るものであらうか。種々の解決の方法もあらうにと思へば、あまりに惜しい人の一生である。果してそれほど生命は安價なものであらうか。果して自殺は、それほど一切を解決する最後の方法であらうか、私は考へさせられる。

自殺にも種々ある。戀愛の破綻、病苦、生活苦、思想的自己分裂、過失や罪惡の苛責等々、數へ上ればかなり複雜な種類となるが、要するに自分で自分を

もてあまし、解決の道を失ふからである。いひかへれば、光が消えて眼の前が眞暗になつた結果である。

こんな場合、自殺を志す人々にとつて、特にうら若い女性にとつて對象となるものは、曾て同じ經路を辿り、脆くも消え去つたこの道の感心できない先輩達である。なるほど考へてみると、古今東西幾多の人生悲劇を開展して見せた自殺は、活人生に、或は有名な詩歌や戯曲のうちに、あまりに多く殘されてゐる。さうして、これらが時の經つにつれて、種々着色され、美化され、理想化され、ロマンチックなものにされて、知ると知らざるとを問はず、人々に喧傳されて行くから危險なのである。

クレオパトラの自殺の如き、近くは坂田山心中の如き、その好例である。後者の場合の如きは、昨年の秋あの地方を講演旅行して、親しくきいたのである

が、一日に六百人からの男女が、事件の場所へお詣りするほど有名なものとなつてしまつた。『天國に結ぶ戀』とは、あまりに甘つたるい言葉ではあるが、時代の精神を動かす何物かをもつてゐるから、こゝに取り上げて見るが、こんな歌や映畫やレコードが流行すればするだけ、同じ轍を踏む後輩のあることを覺悟しなければならない。三原山へと急ぐ若き女性の心に迫る思ひは、かうした自殺ロマンスの憧憬によること少しと誰がいひ得ようぞ。

千葉の山中では『天國に結ぶ戀』をレコードにかけて聽き惚れながらカルモチンを服用して、唯獨りで死んで行つた男がある。また山梨縣では、坂田山心中の記事を新聞雜誌から寄せ蒐め、これを胸に抱いて『お二方の後を慕ひます』と遺書を殘して斃れた男女の情死がある。かう書いてみると、讀む人には自殺がどう想像されるであらうか。それほどに自殺は美しい憧憬の對象であらうか

それとも否か。

自殺は斷じて解決の策にあらず

私は少年時代――失明以前のこと――海水浴場で波間に溺れ死んだ婦人の死體を見たことがある。その時の水脹れした女の顏や手足を、今に思ひ出すことができるが、それは決して美しいものでなく、醜そのものである。子供心に『どんなことがあつても、自殺なんてするものではない。こんな醜い姿で荒筵の上に横へられ、衆人の眼前に無慘な亡軀を曝さねばならないから』と感じたのであるが、それは今も變つてはゐない。

私の記憶する限りでは、この水死した婦人も相應の服裝と相應の容貌とを有つてゐた。懷中には美しい筆跡で、破鏡の悲みを訴ふる遺書もあつたのである。

なるほど、もし人間が自分獨りぼつちで、自分の勝手氣儘に生きることができるとすれば、自殺も許されやうし、他殺も承認することができるかもしれない。しかし、さう許されてゐないところに、人間の哀苦があると共に、それを破つて開かれ行く眞の幸福と喜びもあるのである。だからして『死んだらすべてが解決する』と卽斷して、自殺の道を擇ぶ人々は、それが如何なる原因からであるとしても、斷然解決の策ではないことを熟知すべきである。

何となれば、人間の生命は神から與へられたもので、これを人間の手で勝手に處理することは、解決したやうに見えて、實は一層未解決に問題を殘してゐるものである。天命を完うせずして自殺によりこの世を去つた人々が、後に殘

した家族や親しき者等の運命に、何を強ひつゝあるかを思へば、實に悲劇は悲劇を生むといふべきである。

これを思へば新聞雜誌や、そこはかとなき映畫を見る人々に、願くは自殺をつゞれる涙の小説や三面記事に讀まれないで、引摺られないで、これを讀みこなし、これを批判する見識を、平素から養つてほしいものだといひたい。

最後の最後を突きつめよ

私の自殺を罪惡として否定する理由は、極めて簡單である。なぜかといへば原因の如何を問はず、自殺する人は人間の智慧と力で、蹤き自ら斃れて行くか

らである。若しこゝに神があつて、その神の智慧と力が絶對なものであり、さうしていつも人のため最善を備へ給ふといふことを信ずるとすれば、あるところまでは苦しみ蹤くとしても、結局に於て、我等はこの神の、いひかへれば大自然の慈愛ある懷に自らを任せることができるのではないだらうか。否、一歩譲つて、かうした神の愛と力とを信じきることができないで、人間の智慧と力にのみ頼るとしても、自分獨り極めに『萬事休す』と思ひ込むことが、果して最後の最後であらうか。そこに第三者としての信頼すべき先輩や友人等の正しい批判を待つて見ても遲くはないではないか。

よくあることであるが、早まらないで、耐へ忍びさへすれば、時の經つにつれて、容易に解決する道のあることを誰が否定し得ようぞ。『何とかなるだらう』と、平素の心得が淺慮であり、あまりに樂觀してゐる場合『何とかならな

い』場合に直面すると、直ぐ自殺へと轉向するのが常である。私の知れる限りに於て、自殺して行つた人々にこの種の實例の多いことは事實である。私自身の過去に於ける經驗から推しても、たしかに斷言することができる。

失明苦の絶望より自殺へ

今更過去を語らずとも、私を知るほどの人は、失明の苦盃が早稻田在學當時の私に、如何に殘酷な運命の試錬を持ち來つたかについて記憶されてゐるだらう。ひたすらに憧憬と望みに生きてゐた一青年に、突然襲ひかゝつた暗黑の嵐である。實に人生の悲劇的な呪はれた一場面である。

かうして私に來た運命の急變は、また私の家をその渦中に卷き込まずにはおかなかつた。治らうと蹠けば蹠くだけ奈落の闇は深く、絶望の谷間は涙の水嵩を增して行つた。名醫の手術を受けても駄目、金を注ぎ込んでも駄目、母や妹が身を粉にして看病してくれても駄目、家人の心して捧げた加持祈禱も駄目——人間の智慧と力とを頼んでみて、それが駄目になつたときの私は、たしかに殘された唯一の道、卽ち自殺を擇ぶよりほか、萬事休したと思つたのである。

勿論神佛を信じて、その全能の御手に自分を任せきるなんて、片時も考へることすらできなかつた私は、文字通り闇の子だつた。肉の眼が闇になつたばかりでなく、かうして心の眼も一層深い闇に閉されたのである。

この場合の私は最も雄辯に自殺者の心境を物語つてゐるのではなからう

か。勿論、自殺する人の心境に對して、第三者が甲乙をつけることは甚だ至難な問題ではあるが、たゞ或る男性と添へないからといつて、或は今日口にするものが無くなつたからといつて、健全な五體を備へながら、自らを殺す人々に比べるならば、何といつても肉體の病苦に責め苛まれてゐる者の立場は、更に深刻といはねばならない。

なんとなれば、前者の場合にあつては、もし死ぬほどの思ひで、あらゆる難關を切り脱けたとすれば、どんなところで愛が復活し、思ひがけない幸福に遭はないとも限らず、一歩譲つてよし假に添ひ遂げ得ずとも、眞に愛があらば、愛するもののために人知れず祈り、これを純化し、淨化して、その愛の清さ、貴さに生き貫くことも可能であり、そこにまた深い喜びがあるからである。

或は生活苦の眞中にある者にとつても同樣で、心機一轉さへすれば健全な身

體を何よりの資本として、新しい明日の天地を開拓し得る可能性があるではないか。

併しながら、不治の病に冒されてゐる者、例へば肺結核や、脊椎カリエスの如き、醫師からも家人からも匙を投げられた者にとつて、その病苦から救はるゝ一路を自殺に求めるが如き場合、唯一片の人間の言葉や智慧だけでは、これを救ふことはできない。

私の場合もさうした例の一つであつた。一日生きればそれだけ闇の哀苦が增し加り、家人を動搖の闇と悲哀に導くのであつたから、前途を全く闇そのものと見極め、絶望と斷定して、自殺の道を擇ばざるを得なかつたのである。

生きる者の強さと喜び

曾て拙著『光は闇より』の破本を芥箱から拾ひ上げて讀んだといふ東京在住の、あるばた屋さんが私に寄越した手紙がある。それは屑拾をひする人には似つかない達者な筆で、文句もかなり知識的なもので、ほゞ次のやうなことがかいてあつた。

『曾ての日、友達がしきりに讀め〳〵と勧めた本だつたから、早速讀んでみた。さうして私は、何のこつたいと思つた。この盲目の主人公は、自分の氣持ばかり偉さうに考へてゐるに過ぎない。若し看病してくれる母や妹がなく、病院

へ行く金が無かつたならば、この盲人は何を考へたであらう。私は屑拾ひだ。一日僅か二三十錢しか、それも儲かるか儲からぬか判りはしない。だから私には神も光もあつたものではない……』云々〳〵

この人の批判には、たしかに深刻なものがある。併し屑拾ひをしてゐるからといつて必ずしも人生のどん底を正しく歩いてゐるとは思へない。

京都山科の光泉林といへば、西田天香師とその同人の方々の托鉢道場であることぐらゐは誰も知つてゐるが、この光泉林の門前に『草の小舍』といふ、見るからにお粗末極まるバラックが建つてゐる。壁は藁や破れ傘で作られ、屋根は拾ひ集めた大小取り混ぜての古トタンで葺かれ、疊の代りに筵が敷かれ、立つて入ることのできぬやうな小さい入口のある、全く貧民窟でも見られないやうなあばら家である。しかしそれは何といふ清淨さと輝きに滿ちた場所であら

う。それもその筈、そこでは天下のルンペンさん達が、拜んで掃溜から拾ひ集めたもので、充分に生活を支へられ、懺悔と祈禱に餘念がないからである。

私は天香師を訪ねて行く度毎に、この『草の小舍』の前に立つて、心からの敬意を表するのが常であるが、涙の出るほど嬉しいことは春さきなど壞れ瓶に菜種の花を挿し、これを野天の食卓に飾る風情、いつだつたか大きな牛の骨を拾つて來て細工をし、掛額を作るなど、或はまたこの間も、ミレーの『晩鐘』の額を、硝子は破れてゐても、清い姿をそのまゝに、芥溜からこの小舍の床の間に飾るといつた無一物中、無盡藏の有難さである。

かうした神と人とに許されて生きる者の透徹した強さを見るとき、私は沁々と前記の手紙を書いた東京のばた屋さんを、憐むの思ひで一ぱいである。

話は横道に逸れたの觀があるが、實際は逸れてはゐない。なんとなれば、今こゝまで書いて來たやうな心持で、天地の慈愛を信じ切ることができるならば、私が過去に於て企てた自殺も不必要なら、また例のばた屋さんの皮肉な手紙も書かれずにすんだであらうから。

母の愛より神の愛へ

さて、私は自らの暗み行く運命を痛恨し、そこまで道づれとして引ずられて來た一家の陰慘な姿を思ふとき、天地を恨み、神佛を否定し、人も知る如く、名實共に全く虛無主義者となり終つたのである。

惡いことは二度三度といはれてゐるが、實にその通りで、私が失明した二十

歳の秋には、大阪北濱銀行疑獄事件により、私の一家は、また財を無くしてしまつたのであつた。

かうして涙と呪ひのうちに明けては暮れて行く己が運命を、私はたゞ人の智慧と人の力とのみによつて『萬事休す』と斷案し去つたのである。こゝで私が死んだとしても、多くの人は同情を以て眺めこそすれ、思ひ切つて『死んではならぬ』と警告するには、あまりに事態は急迫し切つてゐるの觀があつたが、問題は實にこゝなのである。

やはり私は死んではならなかつた。自殺は罪惡であり、自殺は卑怯である。といふのは私の取らうとした最後の自殺は、母によつて救ひ上げられたのみならず、思ひがけなくも新しい人生への光明と喜びに導かれる、不思議な、否感謝すべき便となつたからである。

私の手より刄を奪つて泣き伏した母が、

『なんでもよいから生きてゐておくれ、お前に死なれてお母さんが生きてをられると思ふのかい』と叫んだとき、せめて死ぬことによつて母の重荷の幾分をでも輕くし得ると思つた私は、全然豫想もしない結果、卽ち私が死んだならば、母も狂氣になるか、或は私の後を追つて自殺するに違ひないと判明してみれば、一切の狀況はそのとき轉倒せざるを得なかつたのである。かくの如く母は泣き倒れてしまつた。あゝ私は何といふ慘酷な應酬を母の愛に對して示したのであらう。

かくて、これ以上母を苦しめることは、死んでも死に切れないと思ひついた私は、切なる母の愛に勵まされて立上つたのである。こゝに於て呪ひと闇との中であると思ひ込んでゐた人生は、光と愛に變り、こんな不具者をも己が生命

として生きる母の愛は、やがて天地を育む神の愛にまで私を連れて行つたのである。卽ち母の愛と光に甦つた私は、その光と愛を以て天地を拜む信仰に入り得たのである。若しかうした信仰が、あの呪ひの闇の日の前に、豫め備へられてゐたとすれば、私の取らうとした自殺は全く無用であつた。

かく考へ來れば自殺するものゝギリ〳〵に行き詰つた心境の奥に、私は人間の智慧と力を超えて、更に絶對な神の智慧と力のあることを、百パーセント大に信じてほしいといひたい。

神の前に白痴たれ

眞實大觀すれば、人間がどんな生活や、思想や、悲しみや、呪ひや、感謝や、喜びを有つとしても、結局それは神といふ動かない存在の膝の上での、立つたり坐つたりする出來事に過ぎない。この一大自覺さへ有つてをれば、强ひて己が生命を我が手で絶つに當らないではないか。否、さうすることは却つて、この生命を與へ給うたものに對して、最も恐しい叛逆である。從つて罪惡である。

故に私は自殺するほどの決心がつくならば、世間ていや見榮や名譽や、くさ〳〵な利害から、綺麗さつぱり死んだつもりで離脫して、幼兒の如き心に歸り、抱かるべき天地の胸へ『死んで歸る』のではなく『生きて歸る』べきだと思ふ。いひかへれば『天道人を殺さず』『神は必ず常に最善を垂れ給ふ』と信じ貫いて（この際他人と己を比較すると駄目である。なんとなれば、皆異つた道を歩むべく神から期待されてゐるから）耐へられぬところを耐へるべく『神樣、力

をください』『神様お智慧を貸し給へ』と祈りつゝ、運命の苦盃を莞爾として飲み乾すべきである。

かく考へ來れば、己が失明の苦しみを歌つたミルトンの心境は、なんと氣高い忍從に滿ちてゐるといふべきではないか。

『それ神の柔しき軛を、優りて耐へ忍ぶ者は、優りて神に仕へまつるなり』

十五年前、失明のどん底において、多くの友人より最も不運な男といはれ、最も同情すべき哀れな存在と考へられた私が、その後以上の如き信仰を惠まれて、闇の中に光を尋ねつゝ、今日こゝまで歩いて來たとき、同じ友人たちは何といつてゐるであらう『岩橋は失明した方がよかつた。彼が眼が見えなくなつて、却つて運がよかつた。俺達の仲間のうちで、一番早く洋行したし、評判は高くなつたし、大學の教授になつた』と。

私は今も失明者である。失明は人生最惡の一つであることは、今も昔も變りはない。しからば、十五年前の不運不幸が、今日同じ姿の私に、幸福であり、幸運になるに至つた所以は何であらう。私はこの間に横はる祕義を最後まで信じ貫ける人は、倒れても倒れぬ人であると思ふ。

涙は不思議に微笑を生んでくれる。恐れは祈りに代り、歎きは歌となる日が來る。疑はず、天地を信じきる馬鹿者が今の世には少い。人間の科學と智慧とを頼る小さな賢者よりは、神の懷に生活を託さうとする幼兒の方が勝利である。『父よ、我意ならで御意をなさせ給へ』と血の汗を流したキリストのゲッセマネの祈が想ひ出される。

私は幸にして、自殺せんとし救はれて、更生への一路を歩まされた者である。願くは私の經驗に鑑みて、私に教へられるのでなく、私を信ずるので

なくて、私をかくあらしめたものに敬へられ、それを信じきつてほしいものである。

機械文明の自殺と魂の王國

元來機械を造ることに於て著しい進歩發展を見せた現代文明は、機械によつて今日を造り得たゞけ、それだけ機械の長所と短所とをその内に含んでゐることを注意しなければならない。私が平素、筆や言葉を通じて、日本の民衆に呼びかけてゐる問題も、實にこゝにあるのである。先頃廣島文理科大學の講堂や、滿鮮各地の集會にて『機械文明の自殺』といふ話をして來たが、あの堂に

入りきれぬほど溢れた熱心な聽衆は、何を私から受け取つて歸つたであらうか。書いても書き切れぬもの、語つても語り盡せぬものこそ、私が常に書かうとし語らうとしてゐるものであることを、こゝでも力説したい。

死を目指す多くの魂が、個人的自殺を企てゝゐるのみならず、現代文明は洋の東西を問はず、文明自體が大きな自殺を、全般的に企てつゝあることを悟らねばならない。

我國に於ても各種の聲が、喧すしく宣傳味たつぷりに、時代の危機を叫び、『自力更生』を説き『國難打開』『名譽の孤立』等々と、内外に向ひ『かうしなければならない』と强がつて見せるが、さてこれを實行する人の少いのはどうしたことか。

私をして率直に語らしめるならば、私はこれこそ現代人の魂の問題である

といひたい。卽ち機械を造つて、自ら機械になりつゝある人間の一大危機である。それは眞の人間らしい愛や、友情や、誠實さや、眞摯な努力が、ちやらんぽらんな上滑りした、感覺的な、物質的な對象におき換へられて行く結果である。

人間の人間たる眞の價値は、金錢や、權力や、肉體的享樂によつて、決して作り上げることはできない。野から手折つて來た一本の百合の花は命を有つてゐる限り、花瓶の中に美しく咲いてくれるが、もし命を無くしたとすれば、水を與へやうと、針金で支へやうと、起重機で引つぱり上げやうと、その項垂れた頭を上げる術はないではないか。人間の魂の奥に項垂れてゐる頭を、果して何が上げ得る力を有つか。魂は機械ではない。物質でない。だから私は、あまりに見ゆる物の多すぎる現代、特に華かな外界にのみ眼を向け勝ちな現代の女性に、内なる世界、魂の王國を指し示して、そこに永遠の人格と、不滅の光と喜びとを見出してほしい念願で一ばいである。

内なる人は日々に新なり

失明した不運な、歎かうとすればいつでも歎き得る私、妻の顔も、愛兒の顔も知らず、日月星辰はもとより、山川草木に至るまで、これを凡て闇として見るのほかなき私ではあるが、朗かである。たとへ苦しみがあり、悶えがあつても、それが耐へられてゐるではないか。私が偉いといふのではない。私が非凡だといいふのではない。私が賢しいといふのではない。私をしてかくあらしめたものが偉いのである。非凡なのである。

キリストの御弟子聖パウロは『外なる人は壊るれども、内なる人は日々に新なり』と叫んでゐる。實にその通りである。日々新な内なる人の世界こそ、倒るれど滅びず、責めらるれども棄てられざる、力と望と愛の源である。しかして、こゝにこそ、私をして『光は闇より』と叫ばしめた神の奇しき御業があるのである。

私の好きなイタリーの格言に『神は愛なれば扉を閉し給ふとも窓を開き給ふ』といふのがある。苦しいから、悲しいから、やりきれないから、つまらないから、腹が立つから、そして淋しいからといつて、人生を絶望し、咏嘆し、厭世して遂に死を目指す人々に、私は『開かれ行く窓』を見る眼があつてほしいと祈つてやまない。

2

妹

愛に生きんとする女性へ

妹によりて新生涯に發足せる私より……

『己が身を神の悦びたまふ潔き
活ける供物として献げよ』
（ロマ書十二章一節）

生ける劇

十九世紀ドイツの哲學界に、最も深い思索と美しい表現とを以て光つてゐる一つの作品がある。それはロッツエが書いたミクロ・コスモス（小宇宙）であるが、この作品の中でロッツエは次のやうなことをいつてゐる。

一體劇といふものは、俳優の個々の動作や、臺詞や、個々の音樂や、背景の色彩ではなくして、これらのものが渾然と融合して、全體に流れてゐる詩的な美である。かゝる意味に於て人生は、生きた劇とも名附けることが出來る。人生の劇に於ても、我等が觀且つ感じ得るものは、個々の事件や、個々の思想や

個々の感情ではなくして、全體を通じて感得される靈的價値そのものである。

私はこの味ひある言葉を基調として、しばらく神と人とによる生きた藝術について考へてみたいと思ふ。

劇といへば、フランスの劇評家として名のあるブリユン・テイエールは、

『劇は苦悶のないところには發生しない』

といつてゐる。更に二千三百年前のギリシヤの哲學者で賢明なアリストテレスは、

『悲劇とは、恐怖と憐憫とを通じて、吾々の心を淨化する作用である』

と千古不磨の名定義を下してゐる。

すでにロッツエのいふ如く、人生は生きた劇であり、然もそれがブリユン・テイエールのいふ如く、苦悶のないところには發生しないとすれば、何人もま

たアリストテレスと共に、恐怖と憐憫とを通じて、心の淨化されてゆくのを體驗することが出來る筈である。斯樣に考へ來るとき、私は宗教とは、より大きな藝術であると思ふ。宗教とは今いつた恐怖と憐憫とを通じて吾々の心を淸め高め、深めるものである。卽ちそれが生きた藝術たる所以である。吾々の生命に託された神の心、その神の心を創造してゆく藝術的働きといはねばならない。

ミレーの『晩鐘』とその背景

凡そ偉大なる藝術といふものは、その價値を黃金によつて、決せらるべきものではない。事實人類の至寶として不朽に傳へられてゐるやうな偉大な作品は

概して名もないいぶせき茅屋から、或は田園の隅からたゞ神の心に通ふ眞摯な努力によつて產み出された場合が多い。かのフランスの畫家ミレーの作品の如きは、最もそのよき實例である。彼は若い頃パリーで裸體畫を描いてゐた。彼がもしその儘の生涯を續けてゐたならば、今日の偉大なミレーではなかつたであらう。然るに一日彼は妻と共にパリーの街を歩いて、とある繪畫商の飾り窓を覗き込まうとすると、傍で二人の男が立話をしてゐるのを聞くともなく聞かされたのである。一人がいふ、

『おい、これは誰が描いたんだ？』

他の男が答へる、

『この畫はミレーといふ奴が描いたのだ』

先の男が更にいふ、

『これも裸體畫を描かぬと飯の食へない畫家の一人だなあ！』

さうして二人はくす〳〵と笑つた。これを聞いたミレーは思はず全身の血が凍つてしまふやうに感じた。彼は直ぐ妻の手を掴んで、公園の茂みに逃れ、太い溜息と共にいつた。

『今の話を聞いたかい？俺は生活の糧を得るために、裸體畫を描かなければならなかつた。併し畫は裸に限らん。俺の心は疚しかつた。亡き母の言葉が思ひ出される。「お前は何をしてもよいが、神樣の榮光を汚さない仕事をしておくれ」と。だから俺は明日から裸體畫を描くのは止めだ。或は飯が食へないかも知れない。俺はお前を貧乏の道連れにするのは忍びないからこのまゝ別れてくれ。お前はまだ若い。さうして美しい。俺にはこの苦しみを背負はせて、お前を墓場に導くだけの勇氣はないんだ』

『あなたは食べさせなければ夫でないと仰しやるんですか？そんな健氣な決心をなさるあなたを、どうして私が捨てられるものですか。いゝえ、私はいつまでもあなたの側にゐて、あなたの妻であることを誇りたいと思ひます』

かうして二人は固い誓ひを結んだ。更にミレーは一つの提案をした。

『俺はバリーを去らうと思ふ。お前は若い身空でそれが出來るか？俺の行く所は田舍だぜ！さうして俺を待つてゐるものは勞働なんだ。俺は百姓になる。お前は俺と一緒に田舍の土となる決心があるかい？』

それにも淑やかな妻は同意した。かくして三日の後ミレー夫妻は明るい街、歌の街、女の街、享樂の街から永遠に去つた。

さうしてミレーは一介の水呑百姓となつて働いた。繪筆を取つた彼の優しい手に鋤が持たれ、鍬が握られた。彼は額に汗して食つた。そして諺の如く貧

乏の子澤山で、多くの子女に取卷かれ、好き父となつたのである。併し彼等は常に飢餓に曝されてゐた。この生活の眞直中から產聲を擧げたものがあの有名な傑作『晩鐘』である。この繪の完成した頃はミレーの家は毎日の糧にも事缺くやうな有樣であつた。ストーヴに入れる薪すら買ふ金がなかつた。併しミレーの魂は飛躍してゐた。彼の會心の作は斯くして生れたのである。人は餘りにあの畫を三色版で見過ぎてゐる。そのためか、あの和やかな宗敎畫の背景にどれほど深く血と汗の滲んだ生活があつたかを想像して見る者は少い。

アメリカの批評家故ヘンリー・バンダイクは『晩鐘』を指差し『こゝに三つの偉大が象徵されてゐる。一つは勞働だ。一つは愛だ。一つは信仰だ』と批評したことがあるが、正しくその通りである。あの畫の題材は百姓夫婦が、車の傍に農具を横に脫帽して祈つてゐる姿である。見渡す限り廣い田園がある。

勞働がある。夫婦共稼ぎの愛がある。甚だ清い愛である。三角の關係ではない。更に祈りがあるではないか。彼等は地上を凝視め悲觀して、唯頭を垂れてゐるのではない。彼等の耳に響く鐘があつたから、かくの如く冥想してゐるのである。今や西の空に落ちた入日の餘光が、美しく映えてゐる。森蔭の敎會、その塔から鳴り渡る夕の鐘が、彼等に一日の勞働をすこやかになし得たことを、感謝せしめてゐるのである。

勞働と愛と信仰、この三つのものこそ私は神と人との前に成さるべき生きた藝術の最も偉大なる象徵であると思ふ。それもその筈だ。ミレーにあつては彼の生活それ自體が大きな畫であつたのである。棄てゝ顧みられない隱家で、血と涙の中に、數世紀後に來るべき魂と會話してゐる藝術家の苦心は、吾々匆忙として名利に沒頭する現代人にとつて何と懷かしいものではないか。私はかうした世界のあることを思ふとき、今少し神や生命の藝術に對して、眞摯な魂の翼を張り擴げ、心からなる讃美と心からなる祈りを捧げたいと思ふ。

ミルトンの『失樂園』とその背景

私の研究してゐるイギリスの詩人、ジョン・ミルトンは四十四歳で失明した。而も彼は失明の年に妻をなくして、その手にいたいけな三人の女の子が殘されてゐる。人生の悲劇ではないか。而もそれと相ついでクロムウエル内閣の瓦壞となつた。彼はその内閣のラテン語秘書官であつた。今日でいへば内閣書記官長の役目である。クロムウエル内閣が潰れ、而して王政が復古した。唯の内閣

の變動ではない。國體の變革である。共和黨が潰れて王政が押し立てられたのである。隨つて共和黨員クロムウエル派の者はお探ね者である。ミルトンは捕縛されゝば斷頭臺上の露と消えなければならぬ運命にあつた。失明、妻の死、幼き子供、それから政治的失脚、實に人生の悲慘が次から次へと彼の身邊に襲ひかゝつてきたのである。かうした人生の闇と悲哀のドン底に於て、彼はたゞわけもなく運命を呪つたかといふに、さうではなかつた。豁然として悟つたのである。この悟りこそあの偉大な藝術の華を咲かせ、不朽の名篇パラダイス・ロスト（失樂園）とはなつたのである。この失樂園は他の作品、復樂園及び歎きのサムソンと共に失明後の三部曲を構成し、最も痛ましかるべき人生の眞直中に於て、神の榮光を讃へる朗かな魂の歌となつたのである。

これこそ眞の藝術ではないか。正しく眞の藝術は魂の告白である。しかもこゝにアリストテレスの所謂恐怖と憐憫を通じて、我等の心を淨化する作用が認められるではないか。私はミルトンの一生を、特に闇を通しての勝利として思ふとき、心の琴線を震はさずにはゐられない。それは他事ではない、私自身のことであるから。小さいながらミルトンとして、私の闇も同じやうに打勝たれたのである。故にこの闇の大先輩を思ふとき、私はアリストテレスの悲劇の定義は一層確實な眞理の消息だといひたい。

皮肉なことに運命は、樂界の巨匠ベートーベンの耳を奪つてゐるではないか。耳をなくした音樂家は、正に翼をなくした鳥にも等しい。然るにあの偉大な第九シンホニーを始めとして、驚くべき多くの名曲が、音のない世界から生れ出たのである。批評家はいふ『ベートーベンの音樂は悲しみの倉に貯へられた喜びの音づれである』と。ミルトンの失樂園を批評したフランスのラマルチーヌ

もかくいつた『失樂園とは、純眞な淸教徒が思はずもバイブルの上にまどろんだ時の夢だ』と。實に美しい言葉ではないか。しかし唯の夢ならば覺めるであらう。處がさうした夢ではなかつたのである。それは眞晝間に見た白日の夢であつたゞけに、消えやらぬ生の象徵とはなつたのである。かくしてミルトンは癒され難き惱みを癒され、地上では尋ねても會ひ得ぬ內なる光を惠まれたといふべきである。これこそ悲慘そのものゝ中に見た勝利と喜悅の聲であつた。卽ち現實の中に理想を見出し、恐れを換へて祈りたらしめ、涙の中に感謝を創造する力としての淨化作用が、宗敎に存することを如實に現したものといつてよからう。

失明後の私と妹

愛や信念をもつて生きるとき、人生は神と人との共同作品として、奇しき藝術の色と匂とを呈することは、既に述べた如く、ミレーやミルトンの場合に於て明かである。かくの如くにして我等は純粹藝術たる繪畫や詩歌の背景に作家自身の生活が生ける藝術として、如何に大きな內容と意味とを秘めてゐるかを、刮目せしめらるゝことが多い。取るに足らない生涯ではあるが、小さきミルトンとして闇を克服しながら今日に及んだ私は、自らの過去にも、またさういつた奇しき神と人との共同藝術のあつたことを、思ひ出さずにはゐられな

い。あの母の愛に救はれて『光は闇より』と叫んで立ち上つた私が、一家の精神並びに物質的危急を救はんとして、按摩の修業を始め、それが動機となつて點字の存在を敎へられ、再び捨てゝ顧ることもないと思つた學問の世界へ歸る緣を與へられたとき、私の眼となり、萬年筆となつて盡してくれたものは妹であつた。神はこの健氣な兄妹の發足を嘉し給ふたのか、幸ひにして多難な棘の道を開拓することが出來たのであるが、顧れば實に私として分不相應の出來榮であつた。これこそ貧弱ではあるが、神人の合作として、一箇の藝術品たるを失はぬ所以である。

思へば私の失明が原因となつて十七歲の春、女學校を中途退學しなければならなかつた妹にとつて、運命は兄同樣苛酷な鞭を與へたかの如くに見えたのであるが、今となつて見ればそこにこそ、大きな問題が秘められてゐたのであ

る。人生行路が平々坦々たるは、眞の旅人の取るところではない。唯安樂な生活が、人生の目的ではない。いつも安逸が幸福を裏書きするものとは限られてゐない。往々にして、否大抵の場合がその逆である。人生の春に背かれた兄を同じく乙女の春に背かれた妹が、看病する東京の病院の明け暮れから、故鄕の大阪に歸つて一層悲劇的となつた眞暗い兄を、力づけやうとする殆ど無効に近い努力は勿論、叱りつけられたり、小言をいはれたりしながらも、尙疲れ果てるまで、手當り次第ありとあらゆる書物を讀み書かせる努力に至るまで、實に尋常ならぬ苦心と忍耐とが必要であつた。併し幸ひにして私は立ち上り、母を通して天地の親を知り、呪を感謝に換へて、もう一度學問の世界に突入せんとしたとき、片輪者ではあるが、復活した兄を救ける妹の心は、光明に充ちて躍つたのである。なんとなればこゝに至るまで、失明後一箇年半の餘りに暗

い生活は、妹の心境をも幾度か暗くし、自暴自棄に陥らしめたからである。
いつそ東京へ飛出し、女優にでもなつて、太く短く人生を享樂しやうかなど考へてゐた彼女が、その一例である。三時間置きに罨法する硼酸の湯に荒れはてた彼女の手先が、熱いガーゼと共に、眼瞼に觸感されるとき、私はかうした心境の彼女を無理からぬと思ひつゝ、人知れず涙を流すことも稀ではなかつた。併し一切は變つてしまつた。神戸の舊敷地にあつて未だ大學に昇格してゐなかつた當時の關西學院の文科に通ひ出した私を、勇み立つて妹は一心に手引きしたものである。あの最後に發狂した哀れな天才哲人ニイチエや、神秘的な宗教生活に入つて行つたフランスの物理學者パスカルや、イギリス湖畔詩人の一人として、自然と人生を冥想したワーズワアスなどが、いづれも好き妹を有つてゐたことを思ひ起すにつけて、私の學への發足を可能にしてくれた妹を

感謝せずにはゐられない。彼女は私のために、よく讀み、よく書いてくれた。
思へば十七歳の春より、二十四歳の春まで、卽ち私が關西學院の學窓を卒業するまで七年間の、女性として最も華やかなるべき憧れの時期を、兄のために犧牲としたのである。併しながら詩篇が示す『涙して播くものは、喜びをもつて刈らん』の眞理は、如實に現れて來た。兄のために捨てゝ顧ることもしなかつた結婚問題が、彼女と私の學友との間に成就したではないか。女學校を中途で退學しなければならなかつた彼女が、專門學校の教科書にどうでも眼を通さねばならなかつた關係上、學に別れて學を得たといふ結果となつたではないか。生きた萬年筆となつて、私の處女作『動きゆく墓場』の原稿を口述筆記したことが、自らもまた筆をとる才能に惠まれて行く動機となつたではないか。
故に今日の彼女は、片輪な兄を救ける涙と犧牲の生活中に、既に培はれてゐ

たことを發見するに何の無理があらうぞ。かうして妹は妹の道を與へられ兄は兄として今日に至つたことを思へば、この兄と妹との共同作業の後に、今一人の見えざる參加者、神があつたことを片時も忘れてはならない。この神への謝恩と信頼の念があつてこそ、どうにか今日にまで運ばれて來た受難の一路であることを思へば、神人合一の藝術として見るべき人生の意義と價値もまた自ら明かとなるではないか。

この間の消息は、あの白蓮が泥水の中から汚れない花を咲かせるやうに、各〻人には、その與へられた運命を如何に悲しくとも、痛ましくとも、よく忍び、よく耐へて、そこに勝利の花を咲かせるところに、最も偉大な使命があるのを見ても分る。この使命を感じた我等は、自らを、家庭を、子供を、はた社會を神の前に捧げ、その愛に勵まされつゝ、導かれ、强められて最善と眞心に

より、一切をよりよくせんとする精進をすればする程、人生の凡ては神と人との共同藝術となり、無限の意義と價値を把握するに至ることを知るであらう。

3

妻

神の國に生きんとする女性へ

妻と共に異郷の十字架を
脊負ひし私より……

『正しき人の祈ははたらきて大なる力あり』

（ヤコブ書第五章十六節）

大學病院と若き日の望み

病人を看取する仕事が、婦人にとつて、いかに清い貴い仕事であるかを信じもし、憧れもしてゐた私の妻が學校を終へると、鄉里の廣島から京都に赴き同地の帝國大學病院看護婦養成所に入つたのは、今を去る十六七年前のことである。希望に燃えてゐたといはうか、新しい生活の環境が齎す結果とでも名附けやうか、其當時の彼女には何もかもが喜ばしく、思ふがまゝに運んだのである。最初一ケ年の學科を終へ、後二年間の實習をすませる前に、拔擢されて外科病室の主任に上げられ、懸命勤務にいそしんだのである。さうして諸教授

や先生達からも信頼を得、その下で働いた看護婦や見習達からも慕はれた程、妻は實に幸ひ者であつた。幼い日の夢はかくして實現の可能を見るに至つたのである。兩親に伴はれて鄉里の寺に、説教を聽きに行くのを樂しみにしてゐた彼女は、母から買つて貰ふ串についた飴玉の嬉しさと共に、寺の門前に物乞ひする盲人や癲病患者の哀れな姿を、忘れることはできなかつた。其當時比較的家計に餘裕のあつた彼女の兩親、特に慈悲心の强かつた母が訪ねて來る巡禮や或は氣の毒な行路病者等に示す親切な行爲を、子供心にも深く感銘したとみえて『私も大きくなつたなら病院を建てゝ、あんな氣の毒な不具者や病人の方々を勞はつて上げたいものだ』と獨語するのが常であつた。その彼女が、病院を建てないにしても、今や日夜病床に呻吟する多くの人々を、看取することのできる望みが達せられたのであるから、どうして懸命な精進を怠つてゐられやう。かうした順調な月日が二三年も過ぎたのである。併し彼女には、何か充たされないあるもののあることを感じ始める日が來た。日々の忙はしい生活の中から首を擡げ出した人生問題がそれである。いひかへれば職業や日々の生活の奥に、もつとしつかりと、はつきりした信念の力や望みが必要となつて來たのである。考へてみると、これも幼いときから、彼女より離れることの出來ない大きな問題の一つであつた。ものを何處までも突き留めねば承知の出來ぬ性格だつた彼女は暇があると京都にある色んな寺院や教會の門を叩いたものである。また周圍にある先生方に指導を得て、宗教や哲學の書物を漁り讀んだ。併しながら、解決の鍵は見つかるどころか却て彼女は迷路へと這入り込み、だん〳〵憂鬱な暗い魂の有主となつて行つた。丁度年頃からいつても、さうなり勝ちな時期ではあつたが、彼女にも矢張り强い自我の目覺めと共に『何のた

めに生きるのか』といふ疑念が深まり、唯只管に憧がれ求めて來た淸かるべき看護婦生活をも、無意味無價値なものゝやうにさへ感ずる日が來たのである。問題は問題を生み、思ひは思ひを重ねて、益々こんがらがつて行くばかり、而も人としての經驗が高められるに連れて、周圍に見聞する百般の人事に表裏のあることも解り始め出したから堪らなかつた。而も讀み耽つた文藝書の影響も手傳つて、後から考へると愚かしいことではあるが、誰もがさうであるやうに『死』といふ問題をさへ眞實考へたものであつた。併しこのとき、日頃から尊敬してゐる同じ科の一人の先生が目立つて彼女の注意を引き始めたのは、何よりの幸ひであつた。といふのは一切に對して疑の目を有たずにはゐられなかつた彼女ではあつたが、同先生が不言實行とでもいはうか、言行一致とでも名附けやうか、他の諸先生とは全く別人であるかのやうにみえたとき、而も人傳

に聞いてみると、クリスチャンであるといふことが强く彼女の心を打つたのである。これが動機となり、同先生より指導を得て、信仰や藝術に對する眼が開き始めた。かうして『神による獻げの生活』が、再び力强く彼女に戻つて來たとき、唯憧がれて入つた大學病院では滿足の出來ぬものゝあることが、はつきりして來たのである。主任となつてから後は、表面的には月給も多く與へられ、諸先生の傍にあつてカルテをつけたり、顯微鏡を覗いたり、試驗管を弄つたりすることに依り、醫者の卵の如くなつた得意の悅びがある筈であるが、眞實はその反對であつた。本當に看護婦らしい仕事とは、施療患者のやうな比較的不親切に扱はれ勝な貧しい患者を、自分自身が手づから、眞の愛をもつて看病しなければならなかつた筈である。さう思ふにつけて彼女は求道心と使命感とを一層呼び起し、これではならぬと、自己を深く反省するのであつた。搗てゝ加

へて前記の敬愛した先生や、其他の方々が榮轉して病院を去られるといふやうな具體的事情も手傳ひ、遂に彼女は次のやうな決心をするやうになつた。『此後清い看護婦としての生活を、終生の仕事とするためには、私は果して何處まで自分を捨て切ることが出來るか、それを先づ試す必要がある。その確信がしつかと摑み得ぬ限り、私と私の使命は全くゼロに終るであらう』と、これが彼女をして住み馴れた京都帝國大學病院を後に、思ひ切つて東京市外(その當時)中野にある救世軍結核療養所へ、物質的には殆ど無報酬に近い、併し精神的には何物にも優る生活の中へ、身を投ぜしめるに至つた事情であつた。

結核療養所と犧牲の生活

夕日はかくれて　道ははるけし
行末いかにと　思ひぞわづらふ
わが主よ今宵も　共にいまして
寂しきこの身を　はぐゝみ給へ

親しき友みな　さきだちゆきて
小暗きうき世に　ひとりのこりぬ
わが主よ今宵も　共にいまして
寂しきこの身を　はぐゝみ給へ

……　……　……　……

春の入日が西の空を、茜色に染めるとき、二三の患者等が病室の廊下から口ずさむ寂しい讃美歌の節は、私の妻の魂を掴まへずには置かなかつた。只今のやうな建物や設備とは異つて、その當時の療養所は、まだ貧弱なものであつた。特に立派な大學病院から來た彼女にとつて、一層その感が深かつたのは當然であつた。而もそこにゐる患者達は比較的貧しい男女が多いため、身邊の光景は身に迫るものばかりであつた。それにも增して彼女の魂を掴へたものはかうして胸を蝕まれ行く患者達が、病と貧困といふ二重の軛を掛けられてゐるばかりでなく、尙今一つの痛ましい軛である人の世の恩愛から見放され勝ちなことであつた。そこには人生の眞暗い一面が餘りにも强く現れてゐるではないか。彼女は病の看病も看病ながら、かうした病ひ以上の大きな惱みや悲しみを如何にしたものかと考へるにつけ、自分自身が一層しみ〴〵と思ひかへされるのであつた。悲しく暗い人生の一面——それを逆に明るく喜びに變へんとする救世軍の醫員を始め、士官や看護婦達の涙ぐましい祈りや努力がまたはつきりと見えて來るではないか。かうした人生の愛苦や悲喜の織り込まれ行く療養所の明け暮れは、彼女にとつて何よりも立派な信仰への道場であつた。中には病める子を捨てる親があるかと思へば、死に瀕する親を顧みやうともしない子、夫を見舞はない妻があるかと思へば、妻の僅かな小遣ひをすら仕送りしない夫のあるのを見るにつけ、緣もゆかりもない赤の他人が、その親を、その子を、その夫を、その妻を、肉親以上の愛を以つて看病しやうとする人々の生活こそ誠に貴く淸いものであることが解つて來る。すると先きに親兄弟にも告げずひそかに、こゝに飛込んだわが身の決意が彼女にはしみ〴〵感謝されてくるのであつた。

この結核療養所に勤務して、何かと事情が明になるにつれ、經營者の側にあつても、また患者の側にあつても、常に脅威の的となりつゝあるものは、經濟問題であり、而もそれが病苦の上に及ぼす影響の少からざるを思ふとき、妻はなんとかしてこれを少しでも解決しなければならぬといふ念願に充されたのである。折しも所長の發案に基づき、ある外國の結核療養所に於て、最も効果をあげつゝある作業部の計畫を思ひ切つて實行してみる機會が來た。簡單にいへば輕症患者や恢復期の患者達を中心に、醫員や看護婦達が參加し、これらの患者のなし得られるやうな作業——例へば花や野菜を栽培するとか、養鷄をするとか、或は狀袋や箱張り等——をしてこれを市場に賣り出し、實費を除いた收益を以て、患者の入院料や小遣ひの一端に當てんとする計畫である。まづ所長の診察に基づき、病の程度に應じて、作業の種類や時間が定められた。

かうして病床に呻吟してゐた患者達の蒼ざめた顏にも、悅びの色が充ち溢れるときが惠まれたのである。寂しく時としては、耐え切れぬ悲しみとさへ思はれた病室の明け暮れが、目立つて活氣づいて來た。それは恐らく患者達ばかりではなく、醫員看護婦にとつても同樣の感じであつたらう。妻も踊り上つてこの企てに參加した。この頃から彼女は最重病者を入れた第三病舍を預つてゐた故、なか〳〵手を拔くことが困難であつたが、朝四時頃より、夜は眞暗になるまで、寸暇があると庭に下りて、ダリヤの手入や、菜園の掘りかへしに汗みどろになつて働いた。肥料として糞尿を運ぶ仕事なども、我を忘れ心から感謝を以てなすことが出來たのである。かうして療養所の雰圍氣は日增しに明るくなり、來訪の人々も一度門を潛ると、その樣子の變化に眼を見張る有樣となつた。毎朝講堂にて守られてゐる禮拜と、引き續いて行はれる聖書講義にも、多

くの患者が出席し始めたばかりでなく、今までの義理一片といつた態度や樣子は全く無くなり、歌はれる讃美歌にも晴やかな希望に充ちたものが、多くなつて來たのである。かうしてイエスの福音と十字架愛の精神は、言葉や歌となつて人々の口にあるばかりでなく、其の手足の行ひとなつて、醫員看護婦は勿論患者間に於ても相互扶助が行はれ、輕症者が重病者を世話する等、美しい狀景が次から次へと展開されて行つた。畑から取れる手作りの野菜に、舌鼓を打つ患者もあれば、食事時など炊事場から病室に食物を運ぶ見習看護婦を助けやうとする輕症の男女も出て來た。ダリアも美事に咲き出でゝ恰も彼等の生活を祝福するかの如く感ぜられた。

祈りへの準備

あの結核患者特有の咳、痰を吐く音、滅入るやうな呻き聲等が聞える如何にも重症患者の部屋らしい第三病舍――そこには常に六七人の患者が死の恐怖に怯えながら横はつてゐるのであつた。妻は一人の見習看護婦を相手にこれ等の人々に取つてなくてならぬ母として、或は姉として、また妹としての看取に餘念がなかつた。重症者ばかりであるから、傳染の危險も少くはない。併しながら『早く三病舍へ行き度い』と死をもよそに、彼女の足らない看護を、只管に待ち望む他病舍の患者のあることを、聞かされるにつけ、傳染の恐怖等は

全く忘れ果てゝ、一層祈りを込め、日々の勤めにいそしまずにはゐられなかつたのである。全く寄るべもなくして、喉頭結核に斃れた四十二三の男の臨終の如きは、後から思ひ出すもよくやれたと思ふ程、彼女は夢中に看病をしたものであつた。枕邊にあつていつものやうに、匙から食事を與へてゐると、數日前より重態になつたその人は、俄に容態が改まつて呼吸困難を起し、餘りの苦しさにいきなり彼女の胸に抱きつき、狂ひ蹶くのを、じつと勞つてやつた時など思はず病人の口が彼女の鼻さきに觸れんとする程であつた。そして十數分後にその人が冷たくなつて、横はつたのを見たとき彼女はほつとして、顏の汗を拭ひながら『あゝ私も本當に自分を忘れて人のために盡すことが出來た。捧げ切ることが果して自分のやうな者に出來るかどうかと思つてゐたが、今こそそれが出來た』と自問自答し、嚴肅な氣持になつて永眠した患者の兩手を胸の上

に組合させ、默禱したのである。

またこんな事件もあつた。それは田舍の農家から來た四十恰好の婦人であつたが、大分重い腸結核に冒されてゐた。一日に十四五回以上もある便通の世話は外の重病患者らを抱へた私の妻獨りと今一人の見習だけの手薄では、なかなか困難な事情もあり、方々息子のことばかりを口にする病人の心を汲んで、その鄕里より息子を電報にて呼び寄せ、せめて夜分少しなりとも手傳つて貰はうとした。處がその青年は來ることは來ても、一向母親の傍に近寄らうともせず、なか〳〵もつて看病どころか、晝間は療養所のバルコニーにある寢椅子に横はつて講談小說ばかりを讀み、夕方になると『看護婦さん、一寸東京へ用たしに行つて來ますから、お母さんを賴みます』といつては、毎夜の如く活動寫眞を見に出かけ、朝方になつて歸るのが常であつた。ところが餘り裕福でない

病人のこと故、毎日〳〵の數多い下の世話に、一々新しい襁褓を用ひるわけには行かず、汚れたのを洗濯しては、順繰りに使はねばならなかつたのである。その汚物の洗濯はろくに看病もしやうとしない息子に出來る筈はない。さりとて見習に洗はすのも可哀想と思つた妻は、食時後の隙を盗み、雪の降る日も跣足となつて洗濯場で全部洗つたものであつた。それを二十日ばかりも續けたある日のこと、いつもの如く洗濯してゐると、どうしたことか東京へ遊びに行つて歸つて來た息子が、覗き込んでぢつと見てゐたが、遂に涙含んで呼び掛けた。

『看護婦さん、濟まなかつた〳〵、他人の貴女にそんな物を洗はして、洗はねばならぬ筈の私がこんなに遊んでばかりゐて、本當に濟まなかつた！今日から私に洗はしておくれ……』

それからといふものは、青年の態度はころりと變つて、まめ〳〵しく母親の

看病を始めるばかりでなく、今まで見向きもしなかつた朝の禮拜に出席し始め聖書をも讀むやうになつたのである。この一事を推しても、眞の傳道は言葉で無くして、行爲であることが、餘りにもはつきりと體驗されるではないか。かうして彼女の信仰への道程もおひ〳〵開かれて來たのであつた。特に靈魂の永生を信ぜずにはゐられない不思議な事實に、直面させられた一挿話がある。それはざつと次の如くであつた。

矢張り第三病舍に久しく横たはつてゐた患者の一人に、早稲田の學生があつた。その青年は肺結核で遂に永眠したが、實に立派な信仰の有主で、死の最後までニコ〳〵と、常に感謝に溢れ、四十度近くの高熱が幾日も續いた時さへ、一言の苦痛も訴へず、じつと臥したまゝ天使のやうに柔和で、いかに不味い食物も、これを心から感謝して食べるといつた全療養所切つての模範患者であつ

た。故に不平をいつたり、小しのことに我慢なく苦痛を訴へる患者等を窘めるときに、看護婦等はいつも『Tさんを御覽なさい』といふのが習であつた。この青年が遂に天國に召されたとき、しめやかな告別式が催された。聖書朗讀や讃美歌もすみ、今祈りの眞最中といふとき、彼女は不圖目を上げてなにげなく寢棺の方を見ると、その傍に床より約三尺程上方に、その青年の姿がぼんやりと立つてゐるではないか。そのにこやかな顏といひ、死後彼女が着せてやつた白絣の浴衣といひ、餘りの不思議と恐怖に、彼女の全身は冷水を浴びた如く硬ばつて仕舞つた『あつ！』と思はず聲が咽頭から出やうとしたが、祈りの靜けさを破るのをおそれて漸く辭止することが出來たが、彼女の魂はもう身體を離れて仕舞ひ、席にあつて席に無きが如き感じであつた。告別式が終ると、眞蒼になつた彼女は、人を押退け、どうして歸つたか解らぬ程急いで彼女の部屋にかけ戻り、暫くは口もきけなかつた、十字架につけるキリストが、三日後復活し給ふたと聖書に記されてあるが、この青年の姿を目のあたり見た彼女は、それを信ぜずにはゐられなかつた。かうした不思議な經驗が、日々の生活と共に彼女の信仰をいよ〳〵培つてくれたのである。併し未だ我質の强い彼女は全く神の前に、無條件で平伏すことは出來なかつた。ところが遂にその日が來た。それは彼女自身が、病に冒されたことによつて、始めて與へられた御惠みなのである。

肋膜炎と祈りによる克服

以上のやうにして、結核療養所に於ける勤務生活が二年程續いた頃、妻が不

圖した風が原因で、二三日病臥したところ、到底起き上ることも出來ぬやうな病に冒されて仕舞つた。何處となく胸を壓迫されてゐるといつたやうな苦痛が追々烈しくなり、發熱と共に張物板で兩方より締められるやうな感じとなつて行つた。所長の診察によると間違ひもなく肋膜炎になつたのである。『やあ、氣の毒なことだ。またこゝにも一人の犧牲者が出來た』とでもいつてゐるやうに所長の顏は暗く曇つた。『とう〳〵やられたなあ！』といつた聲が、彼女の頭の中でも響いてゐる。彼女は瞑目して、譬へやうもない胸部の嫌な感じを、じつと悚へたまゝ、看護婦寄宿舍の一室に横はつた。すると『職務に最善を盡して病魔に冒されたんだから本望だ』といふ思ひと『このまゝ生命をあの病魔の犧牲にしなければならないとは、なんといふ情け無いことだ』といつた思ひとの二つが、恰も光と闇との相戰ふやうに、彼女の心中で盛に挑み合つてゐた。

併し事實は事實である。最早病氣が肋膜炎と定つてみれば、次に來るべきものは結核で、其の次は死だと觀念はしたものゝ、尙暗い何物かゞ殘つてゐて、だん〳〵彼女を苛み始めた。『運命』とか『宿命』とかいつた不氣味な幻影が、彼女を包んで、何處か未踏の世界へ連れ去るとしか思へない。帝大病院の職を捨てゝ、親兄弟にも語らず、こんなところに飛び込んだことが、無謀ではなかつたらうか、さもなくば神樣のために働かして貰つた私にこんな病が襲ひかゝるなんて——と彼女は自問自答した。すると『いな』といふ聲がこんどは强く彼女を窘めて、次のやうに語り始めた。『神樣の御名のために盡す仕事が、どうして惡い結果となることがあらうぞ。お前はちつぽけな人間の智慧で計り知れない神樣の御旨を計らうとしてゐるから駄目だ。神樣は人間の智慧や供物を要し給はないのである。神樣の與へ給ふ運命を愛の攝理として、柔しく素直に

背負ひとる者こそ最も御旨に叶ふのだ。だからお前の病を、柔しき軛として耐へ忍ぶことが、最も今のお前にとつてなすべき大切な勤めである』と。

主よのむべき　わがさかづき
えらびとりて　さづけたまへ
よろこびをも　かなしみをも
みたしたまふ　まゝにぞうけん

療養所へ來てから、口づさむことを覺えた讃美歌の一節が、思ひ出されて來る。すると今までの疑念や妄念は朝日の前の狹霧の如く消えはてゝ、後に殘るは曾て經驗したことのない心の平靜と感謝の思ひとであつた。彼女の眼から喜びの涙が流れた。氣のせいか胸の苦痛も幾分和いだやうで、勿體なくてそのまゝじつとしてゐるわけには行かないやうな氣持に動かされ、靜かに起き上ると、

床の上で心からなる祈りを神に捧げるのであつた。それは彼女にとつて、最も自然に出來た祈りの最初のものである。こんな心境が惠まれ、病を祈りによつて征服して行くことが出來るやうな自信が生じ始めたのは、發病後一週間目のことであつた。

かうした感謝の念から少々苦しくても、忙しい他の人の手を煩はすことをおそれ、食事の時にはいつも下の食堂へ降りて行くなど、其他身のまはりの一切は大抵自分獨りでやつて行つたのである。併しながら折節若い見習看護婦達が彼女の病氣をも知らぬ顔に、隣の部屋ではしやぎ大騒ぎをするときなど、堪り兼ねて先生にお願ひし、他室へでも變つて貰はうかと思ふことがないでもなかつたが、その都度祈つてみると、不思議にきかれて、靜かになつたり、下に降りて行つたりすることを、屢々經驗せしめられた。尙其他周圍より受ける氣に

障るやうな出來事をも、祈りによつて、餘りにも多く解決されて行くのを見出すことができた。かうした小さい祈りではあるが不思議にきかれて行く事實を體驗して、彼女の信仰は急速度で成長し始めたのである。かうして彼女は今までと全く異つた氣持で、聖書を繙き、大きな慰めと望みと力とを得始めた。併しながら何分信仰の日尙淺く、折節には病氣と前途に對する不安とが手傳ひ、何んともいひ得ぬ悲觀のどん底にひき入れられるやうな感じが深く戻つて來ることもあつたが、こゝだと思ふ心から只管に神を思念して祈るのであつた。すると何處からか風が吹いて來て、そこいらの塵を取り去つて行くやうに、彼女の心中も朗かになり、何んともいへぬ力が奥深いところから湧き上り、また元の平安と喜びに充たされるのが常であつた。この調子で病氣の苦痛をも征服して行くことの祕密を會得した彼女は、凡ての世心を洗ひ去つて只管に聖なる

もののみを憧がれ、全く靈的な雰圍氣に包まれるやう全力を上げて努力したのである。かうした祈りの自信を與へられるやうになつたある日、己が部屋の緣側から、療養所の入口の方を見てゐると、一人の若い女性が入つて來るのをちらつと見た。それは彼女の發病二ケ月前より、この療養所に入院したある農學士の奥さんであつた。前にも書いた通り、こゝでは親を捨てたり、妻や夫を捨てたりする人生の悲劇が多いのであるが、この奥さんはそれとは逆に、全くいぢらしい程夫思ひであつた。毎日〳〵朝來ては夕べまで夫の傍にゐて、何くれと看病する有樣は、見る者をしていつも同情の涙を流させずには置かなかつた。その奥さんの姿を發病以來始めて見た彼女は、その窶れさ加減や、心配さうな表情に驚かされ、我ことのやうに農學士の病狀を氣遣ふ念で一ぱいになつた。

『あの方はきつとお惡いのだ。まあ、お氣の毒な……』といふ直觀が働くと何んとかして治して上げたいといふ願ひに驅られた。折から診察に來た先生に様子を聞くと、豫想通りその農學士の容態は、その後ます〳〵惡く、結核性の肋膜炎と腹膜炎とを併發し、剩へ今では肺も大分冒されて、手足に浮腫さへ生じて來たとの由にて、この調子ではもう十日位しか持たぬだらうとの診斷であつた。これを聞いた彼女は奥さんの心中を察し、堪らなくなつてそれからといふものは、恰も病人の傍にゐて看取するときと同じやうに、全く自分の病氣も忘れ、一心に祈り始めた『正しき人の祈ははたらきて大なる力あり』といふ信念に燃えきつてゐる彼女であつたから、この二心なき祈りを一心に續けたのである。そして今日こそは〳〵と容態の變化を期待して見舞つてくれる先生に農學士のことを尋ねるのだつた。ところが不思議ではないか、一週間程

經つと、先生が首をかしげながら、かういひ出した。

『あの農學士ばかりは不思議だ。既に浮腫が手足に來て、ひどくなつてゐたのに、それが昨日あたりから少しづゝ減き始め、食事も今朝あたりは大分美味しく取るやうになつた。時々かういふ的はずれの結果が生れて來ることは全く有難いが、一體どうしたわけといふのだらうなあ！』

これを聽いた彼女は、さてはと心に非常な感謝を覺えた。『祈りがきかれたのだ！』と思はず口に出やうとするのを怺へて、その後は一層強く心をこめて祈りだした。一週間が過ぎ、二週間が過ぎ、發病後一ケ月半にてその年のクリスマスがやつて來たときには、不思議にもその農學士は目立つて恢復し、そろ〳〵と少しは廊下の歩行が許される程になつた。これは全く祈りのきかれた實證である、而も尙感謝すべきことには、かうして己を忘れ祈ることによつて、

彼女自身の病氣も又すく〳〵と癒されて行つたことである。靜かに考へてみれば肋膜炎や結核の如き神經をいやが上にも尖らせるやうな病苦に苛まれてゐるものは、起きてから夜寢るまで、何を聞き、何を見るにつけても、結局病氣のことを思ひ出さずには居れぬものであるが、それを逆に忘れ、出來るだけ超越せんとする努力を祈りによつて統制し、信仰にもつて行く事が最も病苦に打ち勝つ方法であることを痛感するとき、彼女の場合は全く打つてすげたやうに幸ひな導きであつたといふべきである。療養所とはいひながら、クリスマスの夜は流石に華やかな喜ばしい氣分に充ちてゐた。粗末な材料ではあるが心をこめて飾られたそこゝのデコレーションにも、キリストの誕生を祝ふに相應しいものがあつた。少しの歩行を許されて講堂に行つてみた彼女は、かうした夜の喜ばしい雰圍氣を心一ぱい呼吸して染々と感謝の涙に咽ばされた。クリスマス・ツリーの上に燃えてゐる小さい幾つかのローソクも、彼女には得難い幸福の象徴としか思はれないのである。農學士も奥さんに助けられて集會に列席し、式後には廊下に開かれた摸擬店に行つて、關東煮を食べたり、菓子を撮んだりしてゐた。その傍に佇み、先生や他の患者達に挨拶をしてゐる奥さんの辛勞に窶れた顏にも、今日ばかりは流石に美しいほゝ笑みが涙と共に溢れてゐるのをみたとき、彼女は眞實神の榮光を稱へずにはゐられなかつた。

母性愛の目覺め

かうして發病後二ヶ月にして、外出を許されるやうになつた妻は、漸く自

分の身體に歸つた喜びを有つたのであるが、それと共にまた新しい人生問題に遭遇しなければならなかつた。なる程病氣は一通り恢復したといふものゝ、病氣が病氣であり且つ結核への懸念が多分に殘つてゐることゝて、醫員達は彼女を説得して、徹底した靜養のため遂に療養所を退かしめたのである。思へば京都の大學病院に於ても、救世軍結核療養所に於ても、病苦に苛まれつゝある人々を看取らんとする看護婦の生涯は、女性にとつて最も清く、最も貴い天職と信じてゐた彼女ではあつたが、かうして身體にひゞが入つてみると、果して此後引續きこの天職を全うし得るか否かに就いて、檢討する必要が起つて來たのである。特に療養所に於ける二ヶ年の生活は、彼女の精根を傾けた眞實献身のそれであつたゞけ、餘りに心身を過勞せしめたことも疑ひ得ぬところである。そこには若さの齎す所以から血氣には、やゝ過ぎたと見なさるべきところがない

でもなかつたが、兎にも角これが良いと思い込めば、何處までもやり通さねば我慢のならぬ彼女の性質からみて、當然さうあるべき結果といふ外はない。併しながらたとへ身體を傷つけ、否生命を奪はれることがあつたとしても、彼女は滿足であつた。何となればそこにこそ献げ切つた天職としての彼女の生命があつたのであるから。併しながら今かうして生命を救はれ、而も靜養のため療養所を餘儀なく立ち去らねばならなくなつた彼女の心境には、複雜な變化が生じ始めたのである。それは女性としての彼女に迫るより本質的な使命に就いてゞあつた。何處から見ても看護婦の生涯は立派な使命には相違ないが、女性としてそれに優るより大きな天職があるのではなからうか？——否彼女にとつてのみならず、凡ての女性が女性の名に於て守るべき最も大いなる天職——母性のそれがあるのではなからうか？　かうして二ヶ月間の病床生活は、私の

妻に新しい方向を差し示すに至つたのである。清く獨身にて生き貫かんとする看護婦生活にも、女性なるが故に迫り來る幾多の誘惑が、否寧ろ當然さうあるべき性の問題に躓いたり、犧牲となつたりする者の少くないことを、己が周圍に見聞するとき、彼女は一層切實に母性への使命を痛感するに至つたのである。かくの如くにして母となり、女性の本分を發揮することに、神よりの使命があることを啓示された彼女は、これまた祈りの賜物であるとしか思へない。

この故に後髪を引かるゝ思ひで療養所を去つた彼女は、一見さう見えても決して敗軍の將ではなかつた。否寧ろ病後の身體を靜養することによつて、來るべき人生をより尊く、より清く母性の使命に生きんとして勇み立つ小さいながらも出陣の將であつたのである。併し萬事は神の御旨にあることを信じた彼女は決して自ら求めて、母たり、妻たらうとする機會を作らうとはせず、かへつて

それを超越した者のやうに問題を神に任せまつゝたのであつた。

わがゆくみち　いついかに
なるべきかは　つゆしらねど
主はみこゝろ　なしたまはん
そなへたまふ　主のみちを
ふみてゆかん　ひとすぢに

こゝろたけく　たゆまざれ
ひとはかはり　世はうつれど
主はみこゝろ　なしたまはん
そなへたまふ　主のみちを

……　……　……　……　……

かうして讃美歌の示す如く、彼女は結核療養所の門から外へ、祈りを以つて新しい人生を發足し始めたのである。實に祈りによつて一切を解決し得ることは、神を信ずる者にとつて最大な特權である。人間の目に病苦とみえ、悲哀と映る出來事も祈りによつて解決され行くことを敎へられるとき、私は妻の肋膜炎も彼女を唯苛み苦しめるために與へられた暗い運命の惡戯ではなくして、神の愛なる攝理であつたとし、凡てを感謝を以つて觀察せざるを得ない。なんとなればこの病氣を與へられたればこそ彼女は、眞に祈りの祕訣を我がものとなし得たのみならず、その祈りによつて今日母たる境遇にまで導かれ來つたので

あるから。それは丁度私が失明の闇に躓き自殺せんとした悲劇のどん底に於て始めて感謝すべき光明と喜ばしき人生を惠まれたと同じく、妻にとつてその肋膜炎は何物にも代へ難い尊い賜物であつたことを思ひ、私は心より『受難は恩寵なり』といはざるを得ないのである。

信仰に國境なし

『光は闇より』が物語つてゐるやうに、關西學院在學中私の眼となり、杖となり、萬年筆となつて助けてくれた妹が、私の卒業と共に學友と結婚するに至り、私もまた大阪市の經營する盲學校に敎鞭を取り、さゝやかながら敎へた

り書いたりする生活を始めたとき、妹の代りとして私の傍に來たものが妻である。彼女は中野結核療養所を出てから、病後の靜養を終へ、川崎市にある鋼管會社の附屬病院に暫く婦長として勤務してゐたのであるが、道心止み難く一燈園に飛び込み、托鉢者として私のところに來たのである。さうしてこの托鉢が縁となり、天香師の媒酌によつて、結婚したのであつた。しかもこの後の私達に迫り來つた問題は、經濟苦を提げての英國留學であつたことは、私を知る程の人の熟知されてゐるところであり『パンを貫く聖愛』の主なる話題でもある。私はよくそれを『異郷の十字架』と呼んでゐるが、失明の闇を第一の十字架とすれば、これは正しく第二の大きな十字架であらねばならない。第一の十字架は私と母と妹との三人して漸く背負ひ通せたとすれば、第二の十字架は私と妻の二人して耐ふべき『神の柔しき軛であり』『運命の苦盃』であつたのである。哲人スピノザはその悲劇的な併し靜寂と感謝に充ちた人生體驗の眞直中より『苦難は價値なり』と叫んでゐるが實にその通りである。私がエヂンバラ大學を卒へたとき、哲學の一教授が歸朝の餞として、書き送つてくれた言葉がまたスピノザのそれであつたことを思ふとき、今更の如く意味深長なものゝあることを痛感せしめられる。

さて信仰により妻と共に渡英はしたものゝ、送金するといつた筈の某博士からは百圓の金も屆かない。勿論故郷から電報爲替で取れるやうな身分でもなく異郷の地で金策を賴む程鐵面皮でもなければ、また痛せても枯れても日本人として、外國に恥を曝したくはなかつた私達は、どうすればよかつたらう。搗て加へて正眼者ばかりの大學に學ぶ私には、失明といふ豫想以上の重荷があつた。妻は妻で生れて僅か三ケ月ばかりの長男を故郷に殘して來た斷つに斷ち切

れぬ母性愛の絆がある。しかも私達の懷中には、砂を嚙むやうな儉約をしてみても、五ケ月を漸く暮し得るに足る五百圓餘りの金しかない。狀況はかくの如く餘りに悲壯であつた。屋根裏の四階で朝はパンを齧り、晝には野菜物を肉なしのシチューとして拵へ、夕にはまた生パンに歸るといつた日々の生活は、文字通り緊張そのものである。またさうでなかつたならば、不安と恐怖に怯え通し、到底突破し難きものがあつたのである。まづ『神の國と神の義とを求めよ、しからば衣食住加へらるべし』との聖句が唯一つの力であり、慰めであつた。只管に祈り求めて一日の生活に最善を盡すより外道がない。背水の陣といはうか、必死の突擊といはうか、そこに聞えるものは正しく『生活の進軍喇叭』である。併しながら切り詰めた經濟のこととて、一月分の豫定が、何かの都合で狂つてくると水を呑むより外道がなくなつて仕舞ふ。こんな時不思議に

大學から、宿に歸るとテーブルの上に籠に詰められた卵にバター、肉饅頭に果物といつた品々を發見することがある。妻が驚いて間違ひだと思ひ、宿の女將のところへ持つて行つて返さうとすると、女將は、

『いゝえ、これはあなたのところへ來たのです。八百屋の小僧がミセス岩橋の机の上に置いておいてくれといつて歸つたのですから、大丈夫あなたのところへ來たのです。だから私はあなたの御註文の品だと思ひ預かつたのです』といふではないか。誰にも自分達の經濟のことは打開けた筈ではなかつたのに、不思議にもかうした調子で私達を知る友人の誰かゞ、なくてならぬ物を備へてくれたことは、二度や三度ではなかつた。

これは少し後で起つた事件であるが、故郷で文房具の小店を開き、私達の歸りを待ち佗びてゐる母が、春夏の休暇中には學校も閉ぢることゝして、賣れ行き

の悪いのを知つてゐる私達が、五十圓か某を有りや無しの中から割いて送つたことがあるが、そんな時不思議に足らぬだけを償はれたものである。妻が屆いた手紙の一つの封を切ると『あら！』といふ。彼地では紙幣ならば安全に封筒に入れて送れる習はしになつてゐる。その折にもポンド紙幣が七枚封筒の内から飛び出したのである。誰から何のために來たのか解らないが、兎に角私の宛名になつてゐるから、間違ひなく私達に與へられたものである。祈りを無意義無價値として笑ふ人があるが、私は正しきものゝ祈りは必ず天地に通ずることを疑ふわけにはいかない。病氣が治るとか、貧苦が克服できるから祈るのではない。病氣と貧苦とを神の柔しき軛とし、耐へ忍びつゝ只管に神の國とその義とを追ひ求める生涯の中に、既に祈りはきかれてゐるのである。何となればそこにこそ、耐へ難い病苦が耐へられ、突破し難き貧苦が突破されてゐるからで

ある。『道心に衣食あり、學ぶや祿その中にあり』と支那の聖哲も敎へてゐるではないか。妻が京城神の國運動でエヂンバラ生活を回想して、こんなことをいつたことがあるが、始めて聞いた私は涙の流れるのを禁じ得なかつた。

『食事を戴くのは口ではなくて、心だと思ひます。エヂンバラで戴いたあのバンの味は、その後何處で戴いた山海の珍味よりも旨しく御座いました。それは決して貧惜しみではありません。夫にトーストの良いところを一片與へて、私はその破片を手の平に拾ひ集め、戴くことがありましたが、感謝して戴いたこのトーストの破片ほど有難い食事はありませんでした。それだけ私の心が清められ、緊張してゐたので御座いませう、だから食事を戴くのは口ではなしに、心だとつくゞく敎へられたので御座います』

西田天香師は『この心、この身、このくらし』といはれるが、實にその通り

である。妻のいつた心を心として己の身を律し、己の生活を統制するところに眞の宗教があり、また眞の人生と社會とが生れ來ることを信ずるのは無理であらうか。兎にも角かういつた信仰をもつて私と妻が背負つた異郷の十字架は、また神の榮光を現はすべき祝福された受難の一つとなつたのである。こゝでも『神は愛なれば扉を閉ざし給ふとも窓を開き給ふ』との言葉が、鮮かに立證されて來たのである。私の書いた論文が、ものを言つて、奬學金が授けられ、某博士が送金するといつた金額とほゞ同額のものが、私の手で獲得することが出來たとき、私達は言葉もなく唯恐懼して天を尊び、神にその榮えの一切をきしまつるより外道がなかつたのである。これは私が賢いのでもなければ、妻が強いわけでもない。信仰が賢いのである。信仰が強いのである。天地の愛を信じ、神の親心をもとゐとして行き貫かんとする信仰の勳に外ならないのである。

しかもこの信仰が同じ言葉と同じ血縁を有つ日本に於てゞなく、言語風俗を異にする異郷に於て、かくの如くはつきりと勝利の結末を示されたとき、私は『信仰に國境なし』と心から叫ばざるを得ない。而して眞の神の國が、かうした國境を超越せる祈りの上にのみ建設されてゆくことを思ふにつけて、私は祈りとは神を信ずるものゝ最大なる特權であることを、今更の如く感謝せしめられる。身も靈も實も生命も、この祈りの生活の上に預けられてゐる神よりの預かり物であることを思ふにつけて、我等は益々祈りの奥儀を探り、清く貴き生活を神と共に歩まうではないか。

母・妹・妻＝女性に與ふ＝をはり

Printed in Japan

不許複製

昭和八年十月十五日印刷
昭和八年十月二十日發行

母・妹・妻

定價拾五錢（送料四錢）

著作者　岩橋武夫

發行者　西阪保治
大阪市天王寺區悲田院町二五地

印刷者　中村榮治郎
大阪市東成區鶴橋南之町壹丁目五七八五

印刷所　桃谷印刷株式會社
大阪市東成區鶴橋南之町壹丁目五七八五

發行所　大阪市天王寺區悲田院町二八　日曜世界社　電話天王寺九八五番　振替大阪壹六七四番

岩橋武夫著

光は闇より

『母・妹・妻』
姉妹篇

盲人哲學者の入信手記

發行忽ち100.000疾風的の賣行

東都遊學中失明して闇黒の世界に葬られ失望のどん底にたゝき伏せられた著者が眞の光明の世界に更生するに至る生ける入信事實談非常なる感激をもて讀まるべき良書注文毎刊發行忽ち100.000を賣り盡し重版また重版「母・妹・妻」とともにぜひ御一讀あれ。

定價一部 十五錢 送料四錢

岩橋武夫講演集

1. 私の指は何を見たか
四六判 二六〇頁 上製 定價一圓 送料八錢

2. 暗室の王者
四六判 二九〇頁 上製 定價一圓 送料十錢

3. 愛盲 =盲人科學ABC=
四六判 二三〇頁 上製 定價八十錢 送料八錢

發兌 大阪市天王寺區悲田院町二八地 日曜世界社 振替大阪一六七四

終

MOTHER
SISTER
WIFE

TO WOMEN

by T. Iwahashi

Author of
"LIGHT from THE DARKNESS"